



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 36 回 日本語教育方法研究会
首都大学東京
2011 年 3 月 26 日（土）

会長 川村よし子

今回は首都大学東京のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。是非ともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 36 回研究会開催について

日 時	2011 年 3 月 26 日（土）
会 場	首都大学東京 6 号館 1 階 6-110 教室, 3 階教室
開催委員	長谷川守寿（首都大学東京） 金庭久美子（事務局, 横浜国立大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付 ポスター貼付	1:50	総会
9:30	一般受付	2:20	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:20	会場移動
10:05	会の進め方の説明	3:30	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	5:00	講評, 次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け
11:10	会場移動		
11:20	ポスターセッション開始		
12:50	昼食・休憩	5:45	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

新規入会：3,000 円（年会費）

当日のみ参加：2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語文法 BL モデルの改良—

篠崎大司（別府大学）

本発表では、中上級学習者に対する日本語能力試験 N1 文法対策授業として構築してきたブレンディッドラーニング授業モデルを紹介する。具体的には、1. 篠崎(2011a)を踏まえた e コンテンツの改良、2. 授業実践の報告とその有効性の検証、を示す。検証の結果、アンケートによる学習者満足度調査では、93.2%の学習者が本モデルに肯定的であった。また、テストによる教育効果測定では、平均点で 63.9%の向上が見られた。

2. 日本語中級学習者の非単語反復再生能力の検討—母語話者との比較から—

佐藤礼子（東京工業大学）・福田倫子（文教大学）

新たな語彙を習得する際、語の音を保持する能力（音韻的作動記憶）が関わることが指摘されている。本研究では、日本語学習者向けに開発中の「非単語反復再生テスト」を用いて、中級日本語学習者と母語話者がどの程度未知の言葉（非単語）を保持・再生できるかを調査した。その結果、中級学習者では5～7拍の語で、母語話者では6拍と7拍で難易度が高くなる傾向がみられ、学習者は母語話者よりも正確に再生できる語の長さが短かった。また、学習者にとって繰り返すことが困難だった語を分析した結果、子音の清濁の区別が難しい、子音が鼻音であるもの同士の区別が難しい、同じ子音の並びが繰り返し出現する場合に混乱するといった傾向がみられた。そして拍数の多い語であっても母音は最後まで正確に保持される場合が多いが、子音の正確な保持が困難であることが示唆された。

3. 学習者はドラマ視聴で日本語の語用論的意味に気づくか？

張 文麗（中国 西安交通大学）

中国の日本語学習者は日本製のドラマを日常的に見ているが、ドラマ視聴時に日本語の語用論的意味に気づくだろうか。本研究では中国の大学で学ぶ 30 人の学習者に対して、即時回想法を用いてドラマ視聴時の学習者の「気づき」を調べた。プロトコル分析の結果、学習者は、ドラマ視聴で定式表現（「すみません」、「失礼します」等）の使用、発話行為、敬語の使用、男女・年齢・上下関係による日本語のバリエーション等について気づいていることが分かった。

4. ビジネス日本語教育とアカデミックジャパニーズ教育との比較から示唆される授業実践への手がかり

神崎道太郎（高知大学）・向井留実子（愛媛大学）・橋本智（徳島大学）・正楽藍（香川大学）

「アジア人財資金構想」をきっかけに、大学でも就職活動や就職後に求められる能力を養成するビジネス日本語教育が行われるようになったが、従来から行われている学習・研究のためのアカデミックジャパニーズ教育との関連は明確にされていない。本発表では、ビジネスの報告場面で求められるスキルとアカデミックジャパニーズで養成しようとするスキルの関連を明らかにし、そこから示唆される授業実践への手がかりを提示する。

5. 教育経験の異なるティーチングアシスタントによる Moodle 上での授業報告

趙恩英（首都大学東京大学院生）・長谷川守寿（首都大学東京）

本発表では、日本語教育の現場で教えた経験のあるティーチングアシスタント（以下 TA）と経験のない TA による Moodle 上での授業報告の分析を行い、1)経験者と未経験者では、授業報告の形式と内容に違いがあるか、2)未経験者も経験を積むうちに、経験者と同じように授業報告を書くのではないか、という2点について

検討した。その結果、授業報告の形式の面では、経験者と未経験者の間に相違はなく、使用される語彙に相違が見られた。さらに、未経験者は経験を積む中でも形式の面では変化はなく、内容の面では変化が見られたものもあったが定着はしなかった。これらの授業報告の分析により、教育の現場での経験のない TA のため、授業報告の書き方に関する指導が必要となっているのではないと思われる。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 17 件）

6. 会話におけるパーフェクトの「ている」の使われ方—現在に関係させる過去の出来事—

江田すみれ（日本女子大学）

工藤（1995）は小説での「パーフェクト」について、一時後退性、過去の事態との同時性が表現されるとしている。本発表では、会話における「パーフェクト」の機能を述べる。発話者の存在する現在を中心として語られる会話では、「パーフェクト」の「ている」は過去の出来事を現在に関係させる機能を持つ。過去の出来事で統括主題が存在すると理解できる場合は、現在と関係する事態として「ている」で表現することができる。そして、我々は何を現在とつながっていることとして選ぶかによって、配慮を示したり、自己を主張したりしている。

7. 介護福祉士候補者の自律学習支援のための語彙リスト作成

野村愛（東京外国語大学）・川村よし子（東京国際大学）

介護福祉士候補生は、介護現場で働くと同時に介護福祉士国家試験の合格に向けての学習を行っている。その結果、言葉の使い分けを十分に行えず、介護の専門用語を日常会話でも使用してしまうという問題が発生している。本研究では、国家試験に用いられている語を易しい日本語に書き換え、国家試験の語彙の特徴を明らかにした。さらに、それを元に、効率的自律学習を可能にする易しい日本語を併記した語彙リストを作成した。

8. 日本語学習者の視聴覚メディア使用—教室内外での自律的な学習のために—

谷口美穂（桜美林大学大学院生）

本研究は、日本語教育において、映画、ドラマ、アニメなどの視聴覚メディアを利用して効果的な授業を行うために、学習者が視聴覚メディアをどのように使用し、それを学習リソースとしてどのように捉えているのかを明らかにすることを目的として行った。調査対象は東京都内の日本語学校に在籍する学習者 6 名で、教室内外の視聴覚メディアの使用目的や効果などについて半構造化インタビューを行った。質的データ分析を行った結果、学習者は教室外において、自分なりの方法や様々なストラテジーを用いて自律的に視聴覚メディアを日本語学習に役立てていることがわかった。また、教室外における個人視聴で達成できないことを教師や他の学習者がいる教室内に求め、明確な目的意識を持って視聴覚メディアを活用しようとしていることが示唆された。

9. 小論文作成のプロセスにおける「記事レポート」の実践

大津友美（東京外国語大学 留学生日本語教育センター）

本発表では、小論文作成のプロセスに、新聞記事の内容をクラスで報告するという「記事レポート」活動を取り入れた実践について報告する。学生が書いた記事レポート、記事を読む際に書き込んだマークやメモ、記事レポートに基づいてクラスで行った口頭発表とディスカッションでのやりとりを分析し、この活動の効果と今後改善すべき問題点について述べる。

10. テキストにおける中日指示詞の対照研究—「コレ／ソレ」と「这／那」「这个／那个」を中心に—

朱峰（筑波大学人文社会科学部研究科）

日本語学習の入門段階では、名詞述語文の導入に伴って、指示詞が登場することが多い。例えば、「これは本です。それは万年筆です。」などである。中国語に訳せば「这是书，那是笔」となり、「コ／ソ（ア）」がそれぞれ中国語の「这／那」と対応すると考えるのが一般的である。一方、実際の使用状況においては、中日指示詞には

大きなズレが見られる。筆者は、日本語学習経験者の立場から、テキストにおける中日指示詞を比較することで、両者の機能的な差異を明らかにした。

11. 名詞句パラフレーズに関する研究—上級学習者と母語話者の指示表現を中心に—

坂口清香（筑波大学 大学院生）

本調査は評論テキストおよび小説テキストの指示表現を対象に、上級日本語学習者と日本語母語話者のパラフレーズの相違を明らかにすることを目的とし、8名ずつのデータ収集を行った。テキスト上で繰り返し出現する名詞（句）のパラフレーズ結果からは、学習者の指示表現使用回避の傾向は見られず、テキストのジャンル・形式段落を越えた反復・名詞の種類によるパラフレーズ割合などにおいて、違いや特徴が明らかになった。

12. 会話分析を利用した教材開発—日本語非母語話者の会話における修復に注目して—

初鹿野阿れ（名古屋大学）・岩田夏穂（大月短期大学）

接触場面の会話参加者は、会話の展開におけるさまざまなトラブルに、そのつど相互行為的に対処しつつ会話を進めている。この問題解決の方法は、日本語学習者にとって体系的に学ぶことが難しいと考えられる。私たちは、学習者がこのような問題をいかに解決すればよいかを提案すべく教材開発を行っている。本発表では、相手の話が理解できない、あるいは、自分の話が理解されていない現象に焦点をあて、そのデータの分析とともに、教材の概要を紹介する。

13. 日本語教育におけるディスカッション授業の有意義な目標設定について—ケースメソッドの応用を踏まえて—

古川明子（東海大学）

アジア人財資金構想プログラムの一環として展開された、日本ビジネス授業およびビジネス日本語授業の3つの実践例「PBL（Project-Based Learning）授業」「知的財産権を理解する授業でのディスカッション」「読解テーマから作文へ導くためのディスカッション」の検証を通して、ディスカッション授業の目標設定のあり方を検討した。ケースメソッドの方法を応用することで、授業の教育効果向上を図っている。具体的には、学生の背景を把握しディスカッションに活用する、活発な議論を喚起するテーマを選んで教材を準備する、授業実施時には教師が板書しながらディスカッションリーダーを務める、などである。また授業が到達すべき目標を明確に設定することは、重要な方策と言える。この目標はディスカッションを計画・予測する際に検討され、実施の過程で進化する。目標達成の有無は最終評価につながる。実践例での課題や効果も挙げながら、提言を行っている。

14. 日本語ボランティア養成講座における受講者層の変化と今後の課題

吉田聖子（東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター）

この数年、日本語ボランティア養成講座にはいくつかの大きな問題が見られる。その一部は受講者の社会的背景が多様化したことによる。一方「生活者としての外国人」が生活上必要な最低限の意思疎通を行うために必要な日本語コミュニケーション力を身に着けるという点から見れば、このような受講者の多様化は歓迎すべきものと言える。

15. 中国人初級日本語学習者の語彙習得—提示方法の効果を中心に—

叢立群（筑波大学人文社会科学研究科国際地域研究科日本語教育研究コース大学院生）

中国の大学で日本語を専攻している学習者たちに、異なる提示方法（リスト提示、例文提示、文章提示）によって語彙学習を行わせ、語の読みの習得、意味の習得、用法の習得に差が見られるかどうかを調査した。その結果、新しい語彙の読みと意味の知識を獲得するために、もっとも効率的な方法は「リスト提示」であるが、語の使用に関しては「例文」と「文章」が「単語リスト」より効果的であることが明らかになった。

16. アニメファンから日本語学習者へ—トリニダード・トバゴの学習者の事例研究—

川崎タルつぶら（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻大学院生）

本研究は、トリニダード・トバゴにおける日本のアニメファンに関する事例研究である。発表者が携わったトリニダード・トバゴは日本から遠く、日本との直接接点の極めて少ない地域である。本発表では、トリニダー

ド・トバゴのアニメ好きの日本語学習者を対象に行ったインタビュー調査の協力者（19名）のうちの一人（L1）の事例を中心に上げる。L1は、日本のアニメファンとして、子どものころから日本のアニメを視聴し、現地のアニメのコンベンションで「コスプレ」を始め、アニメソングの歌詞を理解するために自律的な日本語学習者となった。本研究は、L1のアニメ人生から、アニメとの出会い、コスプレ参加、アニメのキャラクターに改名、アニメソングの歌詞を理解するための自律的な日本語学習を分析した。そして、L1の語りを通して、日本語学習への動機や、日本語のクラスに参加する以前にどのような自律的な学習を行っていたかを明らかにすることで、日本語教育側の今後の課題なども考察していきたい。

17. Can-do statements を用いた自己評価に学習者の特性が及ぼす影響—地域日本語教室における外国籍住民を対象として—

入江友理（名古屋大学 大学院生）

「とよた日本語学習支援システム」では、豊田市内に在住・勤務する外国籍住民を対象とした日本語教室を開設・運営支援しており、日本語教室の受け入れ対象者であるかを判断するための対象者判定テストと合わせて、Can-do statements による自己評価を行っている。本研究は、外国籍住民の特性による自己評価への影響を明らかにすることを目的とし、2010年度に対象者判定テストを受けた190名について、国籍、性別、滞在年数による自己評価への影響を分析したものである。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

18. 地域日本語教育支援のためのeラーニング教材開発—「TNe とよた日本語 e ラーニング」—

石崎俊子（名古屋大学）

豊田市の委託の支援事業として名古屋大学は平成20年度から外国人住民が日常生活を営むために最低限必要な日本語能力を習得できるよう「とよた日本語学習支援システム」を構築し、その普及に取り組んでいる。その一環として「TNe とよた日本語 e ラーニング」の開発を行っているが、高等教育機関用に開発された教材とは内容だけでなくマルチメディア機能の設定も大幅に違ったものが要求されていることがモニターを通して明らかになった。

19. 誤用データベースにおける誤用種別の策定

曹紅荃（西安交通大学）・仁科喜久子（東京工業大学）

筆者らは日本語学習者の作文を収集分析し、誤用を抽出し、誤用データベースを作成している。本稿では、誤用種別の策定を検討し、その詳細な定義を説明する。誤用種別は大きくは第0層の「誤用判断に必要な情報、誤用の要因/背景、誤用の対象、誤用の内容」の4つの部分からなり、下位には第1層から第3層の階層構造を成している。誤用の項目が複数の視点で分けられており、「何に関する誤用か、どのような誤用か」のみならず、母語干渉やレジスタの視点から誤用を検討することで、より豊富な情報が得られる。また誤用データを機械的に扱う場合、文法や表記関係の誤用種別は比較的扱いやすいが、意味関係の「語の共起」や「語の選択」のような誤用種別はまだ判定が難しい。

20. シャドーイングを用いた中級学習者の正確さと流暢さ強化タスクの検証

清水慶子・斉木ゆかり（東海大学国際教育センター）

本研究ではJSL中級学習者達が抱える聴解時の速度に対する苦手意識を克服させるため、シャドーイングを用いたタスクを実施し、シャドーイングの文字化データとスポットディクテーションから効果を検証した。検証した研究課題は、Ⅰ.学習者は正確にアウトプットできるか、Ⅱ.学習者は流暢にアウトプットできるかという2点である。スポットディクテーションを分析した結果、誤答数は減少し、正確にアウトプットできていることがわかった。また文字化データの分析から、長期的視点から見ると全体的に流暢さが向上していることがいえる。さらに、シャドーイングの速度を変えて練習することで速度に対する苦手意識を払拭できた学習者は、シャドーイング練習に主体的に取り組むことがわかった。今後の取り組みとしては、学習者が自己の成長を感じられ、自己の学習をマネージングする仕組みを構築することが、モチベーションを維持する上で必要である。

21. 大学学部における「日本語教育実習」実践報告—小学校の日本語教室での学習支援活動を通して—

古川敦子（前橋国際大学／一橋大学言語社会研究科大学院生）

前橋国際大学では日本語教師養成プログラムの中で「日本語教育実習（以下、実習）」を開講している。実習では学生が小学校の日本語教室に「日本語教室サポーター」として 5 日間参加し、外国人児童の学習を支援することが設定されている。そこで本実習の目的を、様々な文化を背景に持つ人々に対して、その立場を理解した上で、どのような日本語の支援が行なえるか考えていく力を養成することとした。日本語教室での学習支援活動の他に、大学の授業では、外国人児童の事例や授業実践例についての資料講読と、実際の児童を対象とした日本語教材・授業案作成を行なった。本発表では、まず 2010 年度の実習の内容を報告する。次に、学生が記入した授業の振り返りとアンケート調査の回答をもとに実習に対する評価を分析し、実習を通じて学生が学んだ成果について考察する。最後に今後の実習の課題、改善点について検討する。

22. 「漢字ネットワーク」作成における iPod touch の使用—初級漢字クラスでの実践—

鈴木理子・齋藤伸子（桜美林大学）

東京都下の私立大学における初級学習者対象の漢字クラスにおいて、iPod touch の辞書アプリを利用した「漢字ネットワーク」タスクを行った。このタスクは共通点を持つ漢字語彙を学生が考えるもので、学習者が頭に思い浮かべた英語にあたる日本語とその漢字を調べる、日本語で語を思い浮かべた場合や英語から調べた日本語がうまく漢字に結び付かなかった場合は、日本語から漢字を調べる、発表時には漢字から意味と読み方・筆順を調べるといった辞書検索が行われる。漢字クラスの担当者による参与観察、および授業直後の担当者に対するインタビューデータから、辞書検索行動には「文字を正しく入力できる」「熟語を調べることができる」「複数の候補語から検索したい語をすばやく選択できる」等の様々なリテラシーが必要とされ、iPod touch と辞書アプリのユーザインターフェースが、これらのリテラシーの向上に大きく関与したことが分かった。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 16 件）

23. 中級日本語文法教材『実用日本語文法 1・2』の開発及び実践報告

宮崎恵子・二瓶知子・鈴木秀明・許明子（筑波大学留学生センター）

筑波大学留学生センターでは、中級レベルでの文法項目の定着を目指し、新たに文法教材『実用日本語文法 1・2』を開発した。この教材は、これまでに学習した初級の文法項目を復習、整理しながら中級の文法項目を積み上げていけるように構成している。また、単に文法知識を得るだけでなく、それがどのような場面で使われるのか、場面とモデル文を提示することで、定着を図るように工夫した。コース終了後に学習者に授業や教材に関するアンケート調査を実施した結果、高い評価が得られ、学習者のニーズに符合した教科書であることがわかった。

24. 大学での日本語教育を支援する IT プラットフォームのデザイン

難波康治（大阪大学）・角南北斗（Web デザイナー/フリーランス）

大阪大学では、平成 21 年度より、今後の留学生数増大にも対応できる新しい教育システムの根幹となる「OU スタンダードカリキュラム」の開発を行っている。それを支援する IT プラットフォームの本格運用が平成 23 年度より始まるが、今回はその開発思想と概要を報告する。特に「カリキュラムの中での IT 利用」を新しい教育システムに即した形でいかにデザインするかについて、その思想と開発プロセスを提示する。

25. 聞き手への配慮を促すための「図形カード並べ」タスクプレゼンテーション能力の向上を目指して—

内藤真理子（立命館大学）

発表に慣れていない学生のそれは、準備してきたことを一方的に話してしまうため、聞き手に十分に伝えられないことが多い。この点を改善するために、正規留学生を対象とした聴解口頭表現のクラスでは、図形カード並べのタスクを行っている。このタスクで一方向と双方向の発表を体験することにより、一方向ではいかに情報が伝わりにくいかということを学生に気づかせることができたと考える。本発表では、タスクの方法を紹介し、観察記録・振り返りシートからの考察を述べる。

26. 中上級日本語学習者の口頭発表における目標表象と評価内容の分析

衣川隆生（名古屋大学）

筆者はこれまで中上級日本語学習者の口頭発表におけるモニタリング能力育成を目的としたアカデミック日本語科目を運営してきた。その科目において学習者は口頭発表で達成すべき目標を宣言してから発表を始める。発表後には目標が達成できたかどうかを受講者が相互に評価する。本発表ではこの科目を受講した一人の学習者を事例として取り上げ、発表、相互評価を繰り返すことにより、その学習者の目標表象と評価内容がどのように変容していくかを分析する。

27. 日本語学習者による TV 会議システムを用いた日本人母語話者へのインタビューとその後の日本語学習者の変化

神谷英里（首都大学東京 大学院生）

日本人母語話者との接触機会が少ない日本語学習者が、自らの学習環境を積極的にリソースとして活用できるようになるために、教師は何ができるだろうか。学習者の学習行動に変化を及ぼすためには、その動機づけを高める必要があると考え、本調査では、インドネシア人日本語学習者を対象に、TV 会議システムと学習管理システムである Moodle を使い、4 カ月間の遠隔授業を行った。授業の最後に、自己決定理論の動機づけを高める 3 つの心理的欲求を満たす活動として、学習者による日本人母語話者へのインタビュー活動を組み込み、動機づけや学習行動の変化を、複合的なデータを基に質的に調査した。その結果、インタビュー活動は高く評価され、その成否が学習行動に影響を及ぼしたこと、授業中や宿題等で学習者がオーセンティックな日本語に触れられるような工夫をし、日本語能力を客観的に判断する機会を提供する重要性が確認された。

28. 初級日本語学習者の自主的教室外活動を目指したポートフォリオの導入—学習者の目標設定と自己評価の観点から—

澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）・後藤典子（東北文教大学短期大学部）・渡辺文生（山形大学）・山上龍子（東北文教大学短期大学部）

本研究は、初級日本語学習者のポートフォリオの記録から、学習段階や日本語レベルによって学習者がどのような目標を持って教室外活動を選び、自分の活動をどう評価しているかについて、考察を行った。その結果、来日直後は漠然と持っていた目標が、様々な活動を通して経験を重ねていくことで具体的な目標へと変わり、活動に対する自己分析も適切に行われていることが分かった。このことから、学習者ができるだけ早いうちから自分に必要な活動を自ら選び、様々な経験をしていくことで日本語学習への動機づけにもつながると思われる。

29. 体験をサポートする日本語の授業—2 週間の短期研修における実践—

吉川裕子・菊池富美子・山田明子（九州大学留学生センター）

九州大学では、初級終了レベルのタイの大学生を対象に、2 週間の体験型短期研修を行っている。本研修は、研修生が自らの視点を通して日本を体験することを目指している。そこで、短期研修における日本語の授業では、体験前の準備と体験後の振り返りを行い、研修生が主体的に体験活動に取り組めるようなサポートを試みた。本研究では、短期研修で行ったグループ活動（グループでの見学と報告、120 分×4 回）を取り上げ、その実施方法と工夫について述べる。グループ活動では、研修生の興味・関心を活かした指導を行うと同時に、学習者間の相互作用を活かしたサポートを行った。実際の活動では、どの研修生も主体的・積極的に取り組み、グループ内でもよく協力し合っていた。また、一連の体験活動において、自分の視点で体験を捉える様子が見られた。興味や協調性を活かした自由度の高いサポートは、体験型短期研修において有効であると言える。

30. タイ人の初級日本語学習者の漢字学習ストラテジー

チョーラッター・ヴィモンヴィタヤー（筑波大学人文社会科学部 大学院生）

本研究ではタイ人の初級日本語学習者、特に高校生の漢字学習ストラテジーの使用状況を解明することを目的とする。そのため、研究課題として以下の 4 つを設定した。(1)全体としてどのような漢字学習ストラテジーを利用しているか、(2)漢字の読み、書き、意味の学習にどのようなストラテジーを使用しているか、(3)タイ語の文字知識を漢字学習に利用しているか、読み、書き、意味のどれに利用しているのか、(4)タイ人高校生にとって効率的である可能性の高い漢字学習ストラテジーはどのようなものであるか。その結果、全体として「使うス

トラテジー」は合計 14 個だった。タイ語の文字知識に関しては、タイ語の母音と子音の位置を表す部分と漢字の構造とを関連付けるストラテジーを「書きの学習」に使用する傾向があった。各技能への効率的なストラテジーは、「読みの学習」が漢字の形の識別、「書きの学習」が漢字を識別することと頻繁に使用することであった。

31. 「四ヶ国共同セミナー・各国の日本語指導法を学び合う」の成果を考えるービリーフスの観点からー

向井留実子・高橋志野・村上和弘（愛媛大学 国際連携推進機構 国際教育支援センター）

愛媛大学では、3ヶ国の協定校から日本語教師を目指す学生と教員を迎え、母語話者教師と非母語話者教師の協働を考えるセミナーを開催した。これは、4ヶ国混合のグループによる教案作成および授業実演という協働が中心であったが、非母語話者学生が主体的に取組み、日本人学生はサポータの立場という形態を取った。協働作業中、非母語話者学生同士の異なるビリーフスから軋轢が生じたが、互いが折り合いをつけ授業実演という最終的な目標を達成した。本発表では、それらの過程をサポータの立場から見ていた日本人学生の振り返りレポートから、ビリーフスへの意識化を考察する。

32. 学習者にとって難解な構文の自動検出

水嶋博志・内田聖也（甲南大学学生）・北村達也（甲南大学）・川村よし子（東京国際大学）

我々は日本語学習者にとって難解な文章を検出するシステムを開発した。このシステムは文章難易度判定システムの一部であり、テ形、マス形、名詞修飾を検出することができる。このシステムでは、形態素解析システム JUMAN と構文解析システム KNP の結果にいくつかの規則を適用する。このシステムは上記 3 つの構文をほぼ正確に検出できることが確認できた。もし入力文の中に上記構文が含まれるかはっきりしない場合、このシステムは断定的な結果を示さず、最終的な判断は利用者にゆだねるようにしている。

33. 教室文化の多様化と「いい授業」観ーオーストラリアと中国の大学生が考える「いい授業」ー

中川良雄（京都外国語大学）・天満理恵（帝塚山大学）・上野山愛弥（帝塚山大学）・安立友野（正智高等学校）

日本語教師ならだれしも「いい授業」をしたいと思っている。しかしその「いい授業」に対する価値観は、学習者がこれまでに受けてきた教育やニーズ（すなわち教室文化）によって異なるのではないか。本研究では、オーストラリアの大学生（英語を母語とする者・英語を母語としない者）と中国の大学生が考える「いい授業」観についてアンケート調査をもとに結果を報告する。

34. 対話の促進を重視した発表・討論の授業デザイン

保坂敏子（日本大学総合科学研究所）

本研究は、上級段階の学習者の口頭発表能力と討論能力の向上を目的に実践・改善を行っている、社会的構成主義の学習観に基づく授業デザインについて報告する。アカデミックな場面での発表や討論などの口頭表現能力を育成する授業において、自分の考え発信する発表技能に対し、他者と考えを交流させる討論技能はなかなか上達しないという現象がしばしば見られる。そこで、筆者は、学習は学習者の相互行為によって成り立つとする社会構成主義的な教育観に立ち、対話の促進を重視した発表・討論の授業をデザインし実践を行った。この授業デザインでは、対話を促すために、発表後に発表担当者が自分の発表内容について 2～3 の討論点を提示して、司会者として討論を進めることが課せられる。実践の結果、発表者自身による討論点の作成活動は、対話の促進に非常に効果的だということがうかがえた。

【昼食について】

当日は春期休業中のため、大学内の学生食堂の営業はありません。駅のまわりに飲食店がありますが、土曜日は混雑も予想されますので、昼食をご持参くださいますようお願い申し上げます。昼食は会場の 2 階をご利用ください。喫煙は、6 号館入り口横の自動販売機が設置されている場所に喫煙スペースがございますので、そちらをご利用下さい。

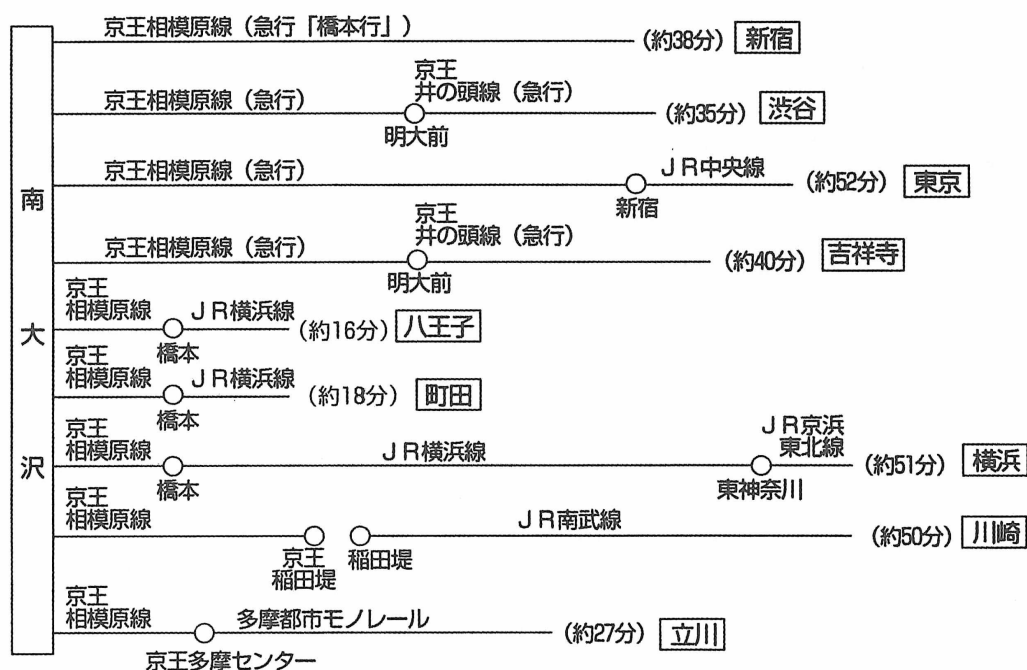
【懇親会】

閉会の挨拶・片付け終了後、学生ホール内の大学生協食堂にて懇親会を行います。
ぜひご参加ください。会費は 2500 円です。

【会場案内】

首都大学東京南大沢キャンパス 6 号館
所在地 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

交通案内（待ち時間・乗換え時間を含みません。）



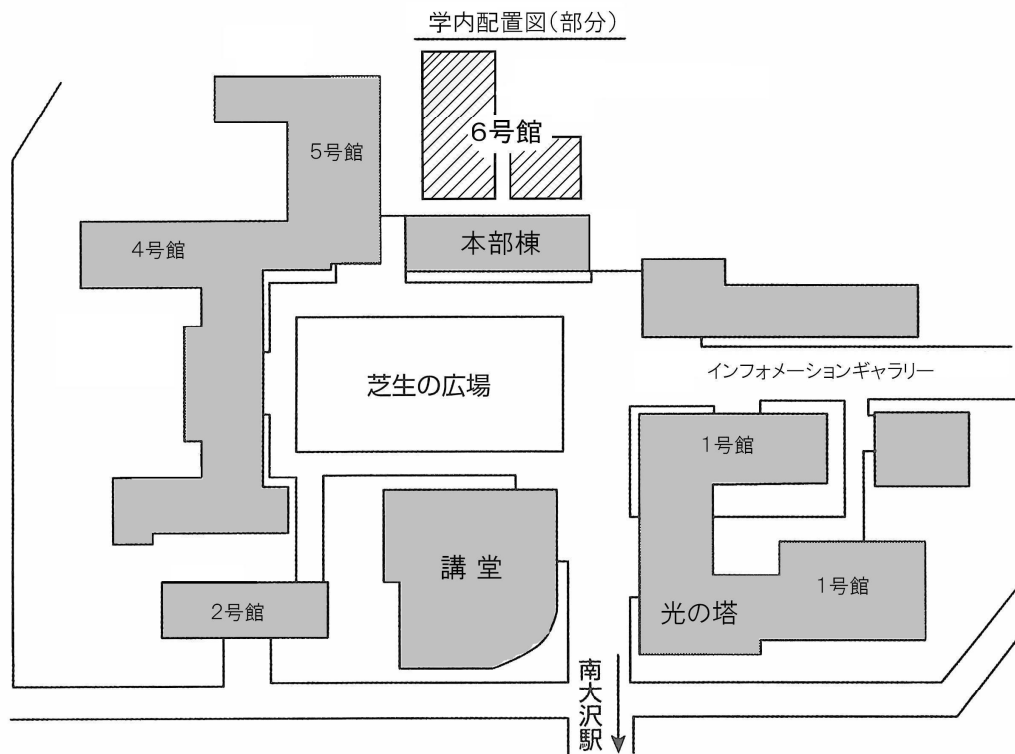
〔南大沢駅から会場まで〕

京王相模原線「南大沢」駅、改札口から徒歩5分です。
改札口を出ると、右手にキャンパスのシンボル「光の塔」が見えます。
会場の6号館は「光の塔」の横を直進してください。



光の塔





(京王相模原線 南大沢駅下車徒歩約5分)

【会費納入のお願い】

JLEMでは1月から12月までを会計年度としております。2011年度会費(3,000円)未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくことになりますのでご注意ください。会費は、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局から払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会